

# 明日の集落を担うのは誰か？

## ～郡山市湖南町横沢集落の活性化にむけて



(横沢集落から眺めた磐梯山)

仙台耕作放棄地研究会

## 目次

### I. はじめに

### II. 対象地域の概要

#### 1. 郡山市湖南町の概要

#### 2. 湖南町横沢地区の概要と地域農業史

### III. 集落調査の結果と分析

#### 1. 横沢集落の現状と今後の人口構成

#### 2. 分析結果から見た集落活性化の方向性

### IV. 風土のフード会と地域活性化の方途

#### 1. なぜ「風土のフード会」なのか？

#### 2. 「風土のフード会」の実施とその結果

#### 3. 湖南野菜作りの会の発足

### V. むすび～集落活性化にむけて～

謝辞

追記

## I. はじめに

本研究会の目的は、耕作放棄地の利活用を念頭に置きながら、少額でもお金を稼ぐことのできる仕組み(いきがい作り)を地域の中に生み出すことである。そのことを通じて、地域住民の人々自らが地域の文化や個性を再発見し、よりよい暮らしを自分たちの手で創っていくためのお手伝いができれば本望である。そのための方法として、①地域にどのような潜在的な力が眠っているのかを知るための集落調査(ひと・もの・場所探し)、②調査結果をたたき台にして住民が集落の将来計画などを語りあうためのきっかけ作り、③学生たちを巻き込んで「風土のフード会」を試みることによって人々が集まる拠点作りの可能性の模索を調査内容として組み立てた。

このような組み立てにした理由について、若干の説明をしておく。

自分たちが住んでいる地域を、もっとよくしたいというのは誰もが抱いている願いである。そして、日々そのために多くの努力が積み上げられていることも事実である。例えば、先進地域の取組みを取り入れたり、専門化のアドバイスを受けたり、諸機関とのパートナーシップを図るなど様々な活動が試みられている。しかし、一方でなかなか期待したような成果を挙げられないのもまた厳しい現実である。

ところが、こうした全国各地で取り組まれ、そして成果を挙げている事例に共通していることは、地域住民の人々が自分たちの地域のことを良く知り、誇りを持っているということである。したがって今回、集落活性化事業の委託を受けてはじめに考えたことは、学生が様々な観点から意見や考えを抱いても、最終的に良い町だなと判断したり、思ったりするのは、実際にそこで生活している人々だということである。本来であれば、その町で暮らしている人たちが、もっとも自分たちの町のよさや足りないものを知っているはずである。私たち学生も、そのためのお手伝いをさせていただくに過ぎない。ましてや、アドバイスや提案というのはおこがましい限りだと考えていた。

しかし、現在の農山村は少子化、高齢化、農業の担い手不足、ひいては限界集落問題など、本来農山村が持っていた機能を失いつつある。集落の人々のつながりは都市に比べてなお強いかもしれないが、当たり前にして脈々と行なわれてきた祭事や集会なども徐々に維持できなくなっている地域も生まれ始めている。こうした現状からすれば、地域住民の皆さんの当たり前前に思っていることがこの先当たり前でなくなる日が来るかもしれないし、また当たり前だと思っている集落の機能や資源も、農山村の現状を知らない学生にとっては、感動したり、感銘を受けたりするものがたくさんあるかもしれない。もし、われわれがなんらかのお役に立てることとすれば、皆さんが普段何気なく眺めたりする景観、食べている食材などを再認識し、共有できる場をつくることではないだろうか。そのために、われわれが調査に入り、調査内容をたたき台にして、様々な意見交換をし、将来の集落の方向性を共に考えていこうと考えたのである。

しかし、誰もが同じように、急激な変化や日々の暮らしを一変に変えることはできないし、集落の将来が大変だからがんばろうと試みてみたところでなかなか人間はすぐには行動はできないものである。特に、地域の人々の現実の生活を無視した活性化モデルはなかなか成功を

収めることは難しく、一部の人々に活動が集中したり、無理なスケジュールで住民が疲れたりなど途中で継続困難になるケースが多い。そこで、まずは住民構成や地域資源の存賦状況、地域住民の意向を的確に把握したうえで、実践的な方向性を考える必要があると考えた。そうしたことから、われわれが目的として掲げたのは、イベントや農作業体験などの一過性のものではなく、地域の人々に確かに手応えが残り、持続的により良い暮らしを作っていけるための地域資源を活用した生きがいを創出できないかというものであった。今回、果たしてその目的が達成されたかどうかはまだ判断できないが、少しでも地域の人々の目線や立場にたって課題を認識できたのは、われわれ大学生にとっても非常に有効な機会となった。

○第1次調査

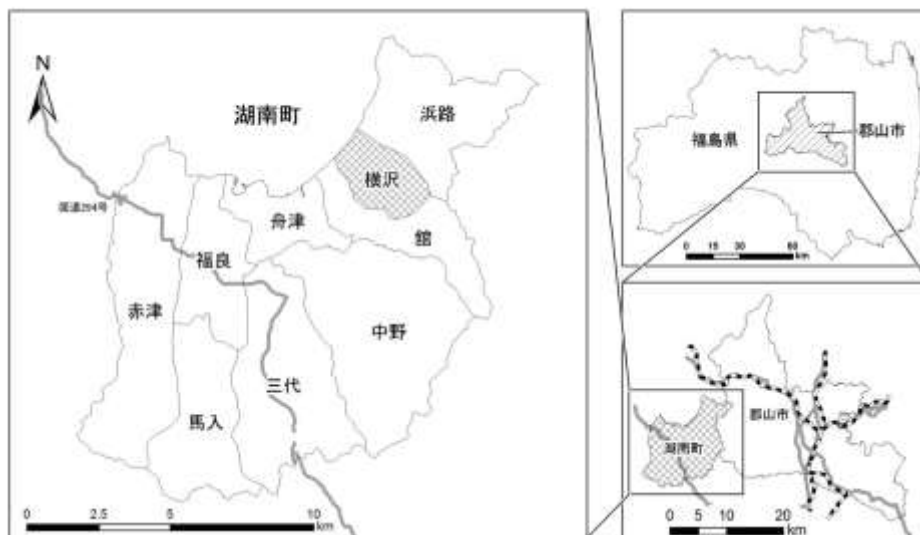
○第2次調査

日時	午前	午後	日時	午前	午後
9月23日	9:00 大学集合・出発 12:00 昼食	13:00 湖南町到着 (横沢地区長訪問) 13:30 集落農業の聞き取り① 16:00 個別農家調査① 18:30 懇親会 (集会所)	11月13日	10:00 大学集合・出発 12:00 昼食(えびな食堂)	13:00 湖南町横沢地区 13:30 景観調査 16:00 農家ヒアリング 18:00 旅館到着 18:30 夕食 20:00 ミーティング
9月24日	8:00 朝食 9:30 集落農業の聞き取り② (個別農家調査②) 12:30 昼食, 休憩	13:30 景観, 史跡調査 (大内氏による案内) 16:00 個別農家調査③ 18:30 夕食 (うまか膳) 20:00 打合せ	11月14日	8:00 朝食 9:30 集落マップの作成 11:00 お料理品評会	12:30 調査報告会 15:00 湖南町出発
9月25日	8:00 朝食 9:30 個別農家調査④	12:30 意見交換会 15:00 現地出発 (仙台へ)			

## II. 対象地域の概要

### 1. 郡山市湖南町の概要

対象地域として今回訪れたのは、福島県郡山市湖南町横沢地区である。湖南町は郡山市の最西端の猪苗代湖の南端に位置し、海拔約 500m の山間高冷地に属している。湖南町の総面積は 167.73 km<sup>2</sup>、東西 15 km、南北 16 km にわたっており、郡山市全体の 20% の面積を占めている。冬季間の降雪量は 80～150 cm であり、気温も最も寒い時期で -17℃ まで下がるような気候条件にある。交通網としては、三森峠のトンネルが 1992 年に開通されたことによって郡山市街地への近接性が高まったほか、幹線道路である国道 294 号線の整備も進み近隣市町村へのアクセスも比較的容易となった。もともと湖南町は、赤津、福良、三代、中野、月形の 5 ヶ村が合併して 1955 年 3 月 31 日に湖南村として発足した。その後、郡山新産業都市の発足に伴い、郡山市、安積郡全町村、田村村、が合併して新郡山市が誕生するとともに、1965 年に湖南村も郡山市湖南町として成立するに至った。また、文化財の面についても福島県 30 景の一つである舟津公園をはじめとして多くの景勝地に恵まれ、指定文化財等も多数存在している地域である。そして、布引高原の風力発電や猪苗代湖から眺望できる磐梯山など自然環境だけでなく、隠れた観光地としての魅力も兼ね備えている。



第 1 図 郡山市湖南町の位置



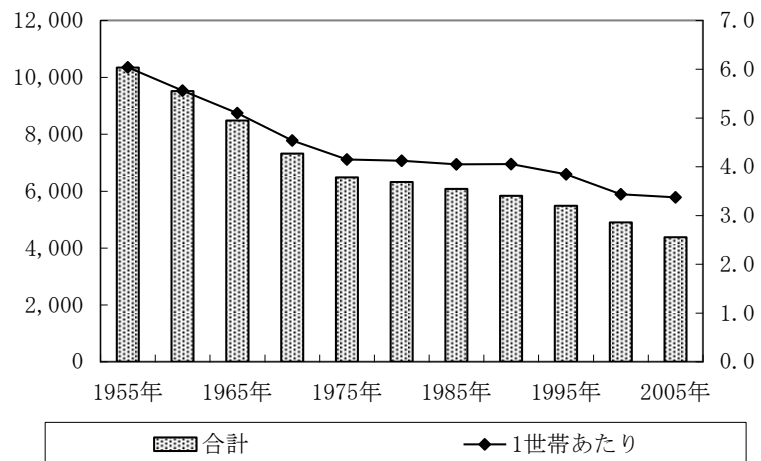
総人口については、湖南村発足時の1955年には10,340人、世帯数1,712戸、一世帯あたり6.03人存在したが、その後一貫して減少傾向を辿り、2011年3月現在、3,839人、世帯数1,275戸、一世帯あたり3.01人となっている。とりわけ、高度経済成長期の人口減少率が高く、5年毎の平均で10%前後の減少率を示している。また、2000年代に入ると、人口減少の勢いは弱まりをみせる一方で、世帯数の減少率が高まりを見せ始めている。これは、高齢者世帯が転居あるいは死亡することによる減少と見られ、これまでの人口の社会減を上回る自然減の兆候がみられる。

次に産業別就業者の構成を見ると、2000年時点において第一次産業の就業者の構成は24.5%であり、同年の郡山市全体の5.2%を大きく上回っている。第二次産業については湖南町39.5%、郡山市27.9%、第

三次産業はそれぞれ35.9%、65.7%の値を示している。したがって、湖南町の産業全体において農業は少なくない就業の機会を提供しており、重要な産業として位置づけられている。ちなみに、総販売農家戸数は533戸、全世帯数に占める割合は41%であり、そのうち専業農家は69戸(12.9%)、第一種兼業農家は98戸(18.4%)、第二種兼業農家は366戸(68.7%)となっており、兼業農家率は8割を超えている。そして、農産物販売金額700万円以上の農家戸数は61戸(11.5%)であり、専業農家数と近似であることからみて大多数の兼業農家と一部の専業的な農家に分化している様子が伺える。

## 2. 湖南町横沢地区の概要と地域農業史

横沢地区は湖南町の北東に位置し、猪苗代湖に隣接した標高510mの高原地域に属する集落である。総世帯数は、以前は82世帯であったが現在77世帯である。そのうち、農業に従



第2図 郡山市湖南町の人口変化

第1表 産業別就業者の構成

	郡山市		湖南町			
	(2000年)		(2000年)		(2005年)	
総数	165,517		2,496		2,150	
一 小計	8,639	5.2	612	24.5	565	26.3
次 農業	8,467	5.1	578	23.2	541	25.2
林業	126	0.1	33	1.3	24	1.1
漁業	37	0.0	1	0.0	0	0.0
二 小計	46,175	27.9	987	39.5	729	33.9
次 鉱業	94	0.1	2	0.1	0	0.0
建設業	18,169	11.0	611	24.5	409	19.0
製造業	27,912	16.9	374	15.0	320	14.9
第三次産業	108,814	65.7	895	35.9	856	39.8

資料：国勢調査

事している世帯は 41 世帯であり、残りの 36 世帯は他産業のみに従事しているか、または年金暮らしとなっており、所有農地のうち水田については貸付を行なっている。統計上の農家人口の高齢化率は 28.7%となっているが、実際の高齢化率はもっと高いということであった。それに対して、地区内の小学生は 14 人であり、湖南町全体でも約 120 人となっており、少子高齢化の現実を物語っている。

集落の西側に基盤整備された水田が広がり、集落の北側と南東に田と畑地が分布している。北東には杉を中心とした山林で覆われており、ほぼ全世帯で保有されている。杉は戦後しばらく電柱材として需要があったが、現在はほとんど利用されなくなっており、所有地の境界線も曖昧になっている部分もある。農地についても基盤整備された水田などの条件の良い圃場は稲作や転作に利用されているが、畑地については耕作放棄されているものが圧倒的に多い。特に、高齢化や人口減少の中で、機械化の進んだ稲作や転作作業においては耕作放棄地の発生はまだ少ないものの、畑地で作付けされる野菜などは極めて労働集約的であるために、労働力不足などを理由にかなりの面積が利用されずにススキや雑草の群生地と化している。

しかし、少子高齢化や耕作放棄地などの問題点がある一方で、集落内の活動は比較的活発に行なわれている。例えば、主な行事である麓山神社祭りや新年祈願祭、なるがみ祭り、二百十日祭、あたご祭りなどが季節ごとに催され、この他に球技大会やカラオケ大会などの文化交流行事も行なわれている。年間数回必ず顔を合わせる場があることは集落内の人々のつながりを強くするという点で活性化を図る上でも地域の貴重な財産である。また、多くの農村ではほとんど機能しがたい状況になってしまった葬式や農作業などの共同作業組織である「ゆい」にあたる 5 人組制度も今年で 32 年目に当たり、集落の交流の場で残っている。また、農家民宿も中山間地域対策事業を契機として 5 年前から始まり、市役所を窓口として小学生の受入を行なっている。ただし、食事のメニューや家族の多い世帯などでは受入が困難など課題も多い。

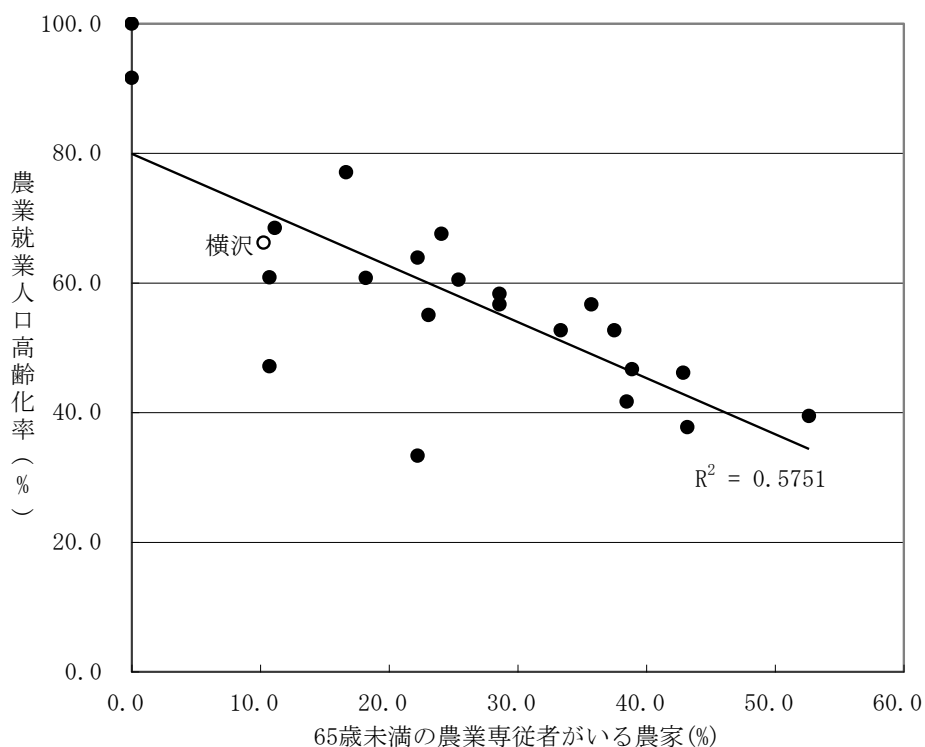
次に、横沢地区の農業の歴史を振り返ると、戦後しばらくは稲作と養蚕、葉たばこ、1~2 頭の役畜に自給野菜の生産という経営形態が一般的であった。また、各世帯で味噌作りや醤油作りも行なわれており、文字通りなんでも作る「百姓」がその当時の集落の農家の姿であったことを想起させる。その後、1960 年代に入って加工用トマトやホップ、山ごぼう、酪農、黒毛和牛などで複合経営に取り組む農家が多数存在したが、減反政策の始まる 1970 年前後から頃から急速に兼業化が進行した。その理由については、複合作物の採算性が悪化したこと、およびその頃に稲作の機械化一貫体系の普及による農業労働時間が短縮したこと、そして過剰労働力が急速に広がった兼業機会(地域労働市場)に吸収されたことを指摘できる。ちなみに、農業の採算性については、1960 年代前半までは「2ha 規模の農家であれば、当時のサラリーマンの給料の 2 人分は稼げる」と言われたくらいで、雇用労働に依存しても経営が成り立つほどの状況であった。ところが、酪農を含めた畜産農家はピーク時に 20 件ほど存在したものが徐々に減少し、他の複合作物も相次ぐ価格低下の中で集落から消え、家計費の上昇に農業だけで生計を立てるのには厳しい状況に立たされる中で労働力を兼業へと振り向けていった。現在では、和牛繁殖農家が 1 戸、葉たばこ栽培農家 1 戸となっており、認定農業者は

4人いるが、そのうち専業農家は1戸となっている。

こうして今は農業従事世帯のほとんどが兼業農家となっているが、兼業の内容もこれまで変化してきた。1960年代前半までは、冬季出稼ぎが一般的であり、関東方面に赴き建設業や自動車産業に従事していた。1960年代後半になると郡山市や会津若松方面への在宅兼業へと切り替わっていった。また1970年代後半には弱電工場や縫製工場が地域内にも立地するようになり、農家の主婦層も他産業に従事するようになった。現在は、不況の影響で弱電工場や縫製工場は減少し、それに替わって介護施設が新たな雇用の場となっている。横沢地区でも弱電工場が3軒立地したが、そのうちの1軒は操業停止になっている。

兼業化が一般化した理由は地域労働市場が開拓されたほかに農業経営の事情もあった。現在兼業農家の多くは以前に加工トマトや葉たばこ、ホップ、中には施設園芸など様々な作物を経営に導入してきた。しかし、価格低下や販路の喪失、規格化などの問題に直面するたびに経営不振に陥り、負債だけが残るケースも少なくなかった。しかも、当時は農地売買や貸借などの移動も少なく、自作地だけで自立した経営を可能にする条件は形成されていなかった。こうした経緯があって、無理に借金をして新たな作物を導入するよりも安定した給料を得られる仕事に就くという選択がとられてきたのである。

現在の横沢地区の農業は稲作プラス兼業の農家でほぼ占められている。しかし、農家間にも高齢化と担い手不足の波は徐々に押し寄せている。第3図は、農業就業人口のうち65歳以上の割合と65歳未満の農業専従者がいる農家の相関関係を見たものである。図に示されるように高齢化が進んでいる集落ほど農業専従者を確保できていない状況にある。その中で横沢



第3図 湖南町集落別農業労働力の状態(2005年)  
資料：農林業センサス集落カードより作成



地区は湖南町全体と比較してみると農業就業人口の高齢化率は 60%を超えており、農業専従者がいる世帯は 10%程度である。今後の地域農業の運営や集落活動を維持していく上でもこうした厳しい現状に目を向けていかなければならない現状であることをこの統計は物語っている。

現在の作物構成は、稲作については多くはヒトメボレが作付けされている。転作については大豆とソバを作付けし、転作割当面積の達成率は 100%となっている。大豆については集落内に大豆組合が存在し、集団的に取り組んでいる。ソバは町単位でそば組合が存在しており、横沢地区ではそば第一生産組合が一手に担っている。このように転作部分については集団的対応となっているが、実際は圃場分散や排水の悪い圃場などの問題もあり、農作業は人に集中するものの面的な効率性を十分に発揮できていない状況にある。この他に農業に関わる集団的な取組みとしては農地・水・環境対策事業がある。一階部分は農道、農地、用排水路の整備補修、草刈であり、二階部分は耕作放棄地の手入れ、遊休農地へのソバ、ブルーベリー、にんにくの特産地化を目指した作付けが行なわれている。

生産された農産物の販売先について見ると、米は農協出荷と集荷業者へ販売され、ソバは農協出荷と同時に町内にある「そば道場」というそば屋で消費されている。大豆は農協出荷であるが、農地・水・環境対策の一環として味噌作りなどの加工の話が持ち上がっていたものの、加工所の建設などの設備投資資金(900 万円)と政権交代の時期に重なったこともあって現在は検討中となっている。しかし、農産物の販路は農協が主となっているが、大豆やソバは転作補助金無しでは成り立たない状況にあり、他の作物についても販売ルートが大きな課題となっている。

以上のように、横沢地区では現在、米、大豆、ソバの 3 作物が生産・販売されている農産物である。この他に、育成中のブルーベリーとにんにくが加わるが産地化されている品目はほとんど無いのが現状であるようだ。しかし、ほぼ全ての世帯で自給的野菜の生産は行なわれており、中には町内にある「四季の郷」という直売所に野菜を出荷している世帯も存在する。それら自給的野菜の生産を支えているのは農家のお母さんたち(主婦層)である。今後、現在がんばっているお母さんたちの力を活かすために販売ルートや加工技術、調理方法、生産体制の仕組みを少しだけ編成することによって農産物を商品化させる方向性を見出せる可能性がある。

### Ⅲ. 集落調査の結果と分析

#### 1. 横沢集落の現状と今後の人口構成

第 2 表は、横沢集落の農家世帯を対象にして行なった聞き取り調査の結果である。はじめに農業従事者の現状について見ていくと、農業従事者がいる世帯数 41 の中で、世帯員総数は 132 名である。男子労働力は 63 名存在し、そのうち 70 歳以上 17 名(男子労働力の 26.9%)、60 歳代は 15 名(23.8%)であり、両者を合わせると 50%を超え、集落の半数の男子が高齢労働力に属することになる。一方、女子労働力については 69 名存在し、そのうち 70 歳以上は 28 名(女子労働力の 43.7%)、60 歳代は 10 名(15.6%)であり、両者を合わせると約 60%となり、

第2表 湖南町横沢地区の農業従事者がいる世帯の状況

農家 番号	経営 耕地 (a)	水稲 (a)	畑		転作		他作物	男子労働力								女子労働力								農地 貸借	作業受委託			農業機械			
			面積	出荷	大豆	そば		男子労働力								女子労働力									相手	○受 △委	内容	トラ	田植	コン	乾
								20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代										
1	1210	1100	50	○			タバコ60				●		●				●			借820	○	刈	○	○	○	○					
2	1140	580	20	○	200	360					◎		×				△		●	借100	○	刈	○	○	△	○					
3	650	250				400				○		●				△		×	借150			○	○	△	○						
4	650	500	10				飼料米150				△		●				△			借150			○	○	○	○					
5	580	500	棄		80						◎		×				×		借200			○	○	○	○						
6	445	350	5		90						◎						△		借200			○	○	○	○						
7	385	300	15	○	70			△			◎		×				△				○	刈	○	○	○	○					
8	370	300	10	○		60	繁殖牛3			△			●				○		借100			○	○	○	○	○					
9	365	240	5		120							●						●		1	△	刈	○	○	×	○					
10	350	250			100						◎							△		○	刈	○	○	○	○	○					
11	320	250	7			70					◎		×				×		借60			○	○	○	○	○					
12	280	200	棄		80							●						●				○	○	○	○	○					
13	275	200	5		40	30						▲					×		1	△	刈	○	○	×	×	○					
14	270	220	4		50							◎						×	借60			○	○	○	○	○					
15	260	180			80		枝豆20				◎						×	×	借50	1	△	刈	○	○	×	○					
16	255	200			30		飼料米25						●					×				○	○	○	○	○					
17	253	200	3		30	20						◎					○		×			○	○	○	○	○					
18	250	180	20	○	50						◎		×				◎		×	借70			○	○	○	○	○				
19	240	200	棄		40							◎						×				○	○	○	○	○					
20	235	180	5		55						×	◎						×				○	○	○	○	○					
21	220	160	10			50						◎			○		○		●	2	△	植, 刈	○	×	×	×					
22	210	150			60							◎					◎		×			○	○	○	○	○					
23	210	120	30	○			飼料米60					△		●				×				○	○	△	○	○					
24	205	150	棄		55					×		◎						×				○	○	○	○	○					
25	190	130	棄		60							◎						×		10	△	刈	○	○	×	×					
26	180	130	棄		35	15					◎						△		×	10	△	刈	○	○	×	×					
27	180	120			20	40		△				◎					△		2	△	刈	○	○	×	×	○					
28	174	70	4		30							◎		×			×		1	△	刈	○	○	×	×	○					
29	170	120	棄			50						◎			△		○		×		○	刈	○	○	○	○					
30	168	120	8		40			△				◎		×			×					○	○	○	○	○					
31	160	120	20		20								●				○		●			○	○	○	○	○					
32	150	120			30			△				◎					×		×	10	△	刈	○	○	×	○					
33	150	150	棄					△				◎					×		×			○	○	○	○	○					
34	140	110			30			○						×					2	△	刈	○	○	×	×	○					
35	120	100	棄		20							●			○			●		△	刈	○	△	×	×	×					
36	100	100	棄									△		●								○	○	○	○	○					
37	98	80	10	○	18							◎					×						○	○	○	○					
38	95	70	棄		25							◎					○		×	7	△	刈	○	○	×	×					
39	67	0	40	○	27								●				×					貸180	○	×	×	×					
40	32	30	2					△					●			△		○	×	29	△	刈	○	×	×	×					
41	20	0			20							◎						×		貸100			○	×	×	×					

2010年9月の聞き取り調査により作成

凡例：●農業専従 ▲農業主兼業従 ◎農業従兼業主 ○他産業のみ(町内) △他産業のみ(町外) ×無職・手伝い

男子よりも高齢化率は高い。また、農業専従者(●)に限定してみると、男子14名(男子労働力の22.9%)のうち70歳以上の農業専従者は10名(71.4%)となる。女子については農業専従者7名(女子労働力の10.9%)うち70歳以上は5名(71.4%)であり、横沢集落は高齢労働力の専従者の存在が厚い層をなしていると見ることができる。また、女子労働力の無職・手伝い(×)となっている世帯員においても実際は自給的な野菜作りを行っており、商品化されない潜在的な労働力であり、集落の農業生産を支える重要な役割を持っている。

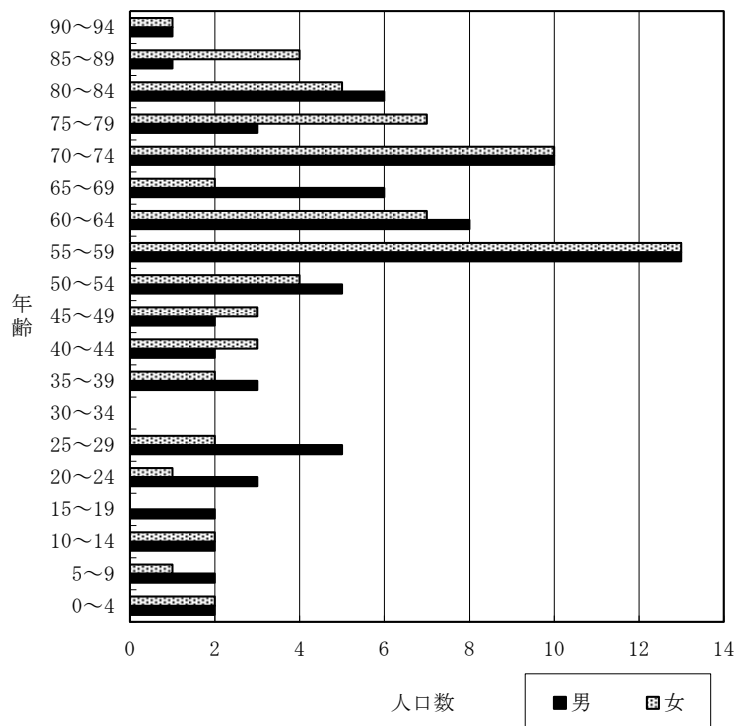
一方、兼業従事者は男子の場合、50代、60代に集中している。50代19名のうち兼業従事者は14名であり、全員兼業のほうが主となっている。60代15名のうち12名が兼業従事者であり、農業を主としているのは1人のみとなっている。女子の場合、兼業従事者は40代、50代に1人ずつ存在しているのみである。また、兼業従事者の就業先を見ると、鉄鋼業、建設業、運転手、会社員、介護福祉士、公務員、縫製工場など多様であり、ほとんどが安定した恒常的勤務の形態となっている。なぜなら、農業経営が機械化の進んだ稲作であり、転作部分についても組合に委託しているため、休日に稲作の機械作業を行なう労働力配分で対応可能となっているからである。したがって、経営耕地面積規模は20a~1200aまでと幅広い階層性となっているが、農業機械を保有しているうちは自己完結できるため、農業従事者と非従事者との階層性が明確にならないのである。

また、20代、30代については男女ともに同居している世帯員は少なく、それぞれ8名となっている。ただし、別居している場合でも郡山市や会津若松市など県内に在住している場合が多い。将来、横沢地区に戻ってくるかは不明であるが、農繁期などで手伝いに来る可能性は高く、現在居住している家族を支援するネットワークは存在していると見てよい。

第4図は少子高齢化の様子をわかりやすくするために人口だけを取り出して5歳間隔に再集計した人口ピラミッドである。典型的な少子高齢化の形であるが、そのうち65歳以上の高齢者は、男子で27人(35.5%)、女子で29人(42.0%)となっている。そして、横沢集落には30～34歳の人口は存在していないが、これは団塊世代のこどもたちにあたる。団塊世代はちょうど減反政策が始まったころに就農した世代である。自らの体験やその後の農業情勢を受けて、子ども世代に農業を継げとは言えなかった、あるいは職業選択の自由度が高まりを見せる中で農業以外の仕事へと吸収されていった年齢層であるとみることができる。

これまで見てきたように現在の人口構成は男女ともに50代から70代に人口は集中している。現状のままで10年後を想定してみると、その人口構成は現在の50代が60代に、60代が70代にそのままスライドする。例えば、10年後に80歳代は労働力として数えないとすれば、農業従事者世帯の人口は現在の132人から87人となり、35%の減少である。さらに、その時点での60歳以上の人口構成比を計算すると、男子では58.6%、女子では73.1%と超高齢化とさらなる人口減少というのが横沢集落の姿として想定される。この計算は、あくまで単純計算したものであるから、実際はいま他出している世代が戻ってくる、あるいは定年帰農などを考慮に入れると数値は若干変更されるだろう。

しかし、先にも指摘したように農業経営においては50～60代が農業機械の作業を行い、70



第4図 横沢集落の人口ピラミッド  
資料：聞き取り調査より作成

代の人たちが集落農業の生産を影で支えているのが現状である。10年後には今の50代、60代は定年を迎えて農業専従者に戻ってくることが予想されるが、その人たちは現状の人口構成比上で最も層が厚い世代でもある。その人たちの活躍できる場面を今のうちから作っておく必要があるというのがこの集落表から示唆される。そのためには、現在の70代の世代の人たちが生きがいを持って活躍できる場面を作りだし、次の世代へ引き継いでいくことが集落の維持、活性化につながる方向性として模索されてよいであろう。そして、高齢者の活躍という課題は決して夢物語ではなく、その条件も整いつつある。

## 2. 分析結果から見た集落活性化の方向性

以上の住民構成の分析結果から、今後の集落活性化の方向性としては以下のようにまとめられる。

①現状では集落全員参加で何か一つのアクションを起こそうとするのには限界がある。なぜなら、現在50代の兼業従事者の方たちは毎日の通勤があるため非常に多忙だからである。加えて、農業機械が稼働するうちは個別で経営対応をした方が融通が利くというのも事実であり、現状では経済的に見てもまだ採算が取れる余地はある。例えば、自分で稲作農業機械一式を保有し、160a自作して10aあたり8.5俵とれ、精算米価は12000円/60kgと仮定する。『農業経営統計調査 平成20年産米生産費（福島・販売農家）』において米生産費の費用合計は10万440円/10aであり、一戸あたりの面積は159aとなっているのでこれを元にして計算すると、稲作をやって年間で手元に残るお金は約2.5万円である。

(計算例)

$$8.5\text{俵}/10\text{a} \times 160\text{a} \times 12000\text{円} = 163.2\text{万円 (粗収入)}$$

$$163.2\text{万円} - (10\text{万}440\text{円}/10\text{a} \times 160\text{a}) = 2.5\text{万円}$$

いま使用した生産費は労働費も算入してあるから、自家労働力は計算に入れず、物財費のみで計算すると生産費は6.5万円/10aとなる。この値を用いて先ほどと同じように計算すると、稲作の実収入は59.2万円となる。他に安定した仕事があり、機械が稼働するうちは自家労働費を計算しなければ米づくりは一つの収入源になっていることをこの値は示している。しかし、労働費を計算に入れないという乱暴な計算をしても、現在の米価水準の下では160a作付けで100万円に届かない。これが、兼業せざるを得ない経済的な理由であるとともに、農業をやめることもできない理由である。したがって、いま外に稼ぎに行っている壮年層は日々の忙しさもあって集落活性化に本腰を入れて取り組むことは時間的にも経済的にも難しいと思われる。

②しかし、定年退職後は農外収入が基本的になくなるので、その時に少しでも生きがいをもって活動でき、それに少しのお金が入る仕組みが集落を活性化させるためには必要である。特に、60代以上の主婦層はこれまで自分たちが食べる分の野菜を何種類も作ってきたことは調査からも明らかとなっている。その力を活かして高齢の方でも、むしろ定年退職後の老後

を楽しむ気分で活躍できる場面を作り出すことが重要である。そのためには、作られた農産物の販路の開拓や地元の宣伝なども必要となってくるが、お父さんたちがサポート約を務めたり、まとめたりする役割を担って支えたりすることも必要となってくるだろう。

③その点については、横沢集落には、大内さんや区長さんをはじめとするリーダーシップを発揮できる人たちが存在している。現状ではまだ点的な存在であることはいなめないが、これが緩やかなネットワークで繋がり、広がりを見せれば可能性は大きく広がるだろう。ただし、何か新しいことや珍しいことをしようと考えてはいけないだろう。すでに隠れた宝物は集落にたくさんある。そして、無理をしないということも大事であり、がんばらないがモットーくらいでよいだろう。特に、現在の60代後半から70代後半の人たちは知恵も豊富だし、何よりも日々元気に野菜作りや集落活動を行なっている現役バリバリの主婦層である。しかし、この人たちが疲れるくらいの活動を集落の中で行なってもそれは持続的ではない。あくまで生きがいの延長線上での小遣い稼ぎである。

集落活性化は、「ないものねだり」ではなく「あるものさがし」から出発して未来のより良い集落の姿を創造しなければならない。横沢地区の将来は、一見すれば前途多難のように思えるが、各世帯の平均人数は3.2人と2世帯居住の形態は保たれており人口は比較的存在する。すなわち、これからの地域づくりを支える潜在的な力は残されていると評価できる。現在は地域の人々の創意と工夫によって潜在的な力を開花させる時期にさしかかっている。

## IV. 風土のフード会と地域活性化の方途

### 1. なぜ「風土のフード会」なのか？

集落調査では農業の現状と人口構成からみた問題点を把握し、地域住民の方々の意見交流を図ることができた。その上で、農業を中心とした耕作放棄地の利活用、地域活性化にむけたきっかけ作りとして食の展覧会と題した「風土のフード会」を行い、食や農を通じた地域資源の再認識の場を作ることで世代間、都市と農村の人々の意識の共有を図るイベントを企画した。こうしたイベントは確かに一過性のものではあるけれども、集落調査の結果から、これからの横沢集落の活性化や維持を考える上で、高齢の方たちのいぎがいの場面を作り出すことが一つ模索されてよいと考えた。まず、今回なぜ「風土のフード会」というイベントを開催したのか、その趣旨を説明する。

①10年後の集落予想図を考えてみると楽観しできない状況にあり、今がまさに土俵際にあるということがわかったことである。しかし、横沢集落には農業生産の影の主人公が存在している。とりわけ、商品化されない野菜作りを脈々と行なってきた主婦層は集落の底力となっている。そうしたお母さんたちの潜在的な力をもっと活用できるのではないかと。そこで、お母さんたちに力を貸して頂いて、普段食卓に並ぶような家庭料理を作って持ち寄っていただき、食べ物を通して地域に眠っている力を学生たちの目から調査しようとするイベントを企画した。

②畑(生産)と台所(生活)を結び付けることが重要であるからである。農業は単に土地から

何がどのように産み出されるかということだけでなく、その生産物が保存とか調理とかの様な過程を通じて人々の口に入るものであり、人間的生活の根幹を成すものである。冷凍技術や輸送技術の発達によって農産物は産地から遠く離れた場所で消費可能になっている。しかし、遠くから農産物を運ぶことはできても、地元で取れたての食材や独特の調理法によって形づくられる食卓そのものを運ぶことはできない。こうした直接目に見えない地域の財産が世代継承されないと横沢らしさや湖南町らしさといった地域固有の特性(風土)が消滅してしまう。その点をフードと風土をかけて表現したのである。そして、単に料理を食べるだけではなくて、どんな食材を使い、どんな調理方法で作ったのか、を調査して記録することでレシピ集を作成することで記録として保存できるように配慮した。普段食べている家庭料理も地元の食文化をアピールできる手段となりうるし、湖南町のような高冷地という地域特性を活かした高原野菜は一つの目玉になると考える。また、食材に地元産を使っているのであれば、野菜作りを食と結びつける道も模索できる可能性もある。そして、今後民泊や農業体験などの交流人口を拡充したいという地域の意向もあったため、その観点からも人々が集まるきっかけを作ろうということになった。

③集落本来の自治を取り戻すきっかけ作りを意識したことである。少子高齢化や耕作放棄地の問題、限界集落などは、即座に地域レベルで解決できる問題ではなく国民経済レベルに深く根ざした問題である。さらに、今後は人口減少時代を迎えることや財政面においても中央への依存は極めて難しくなっており、多くは期待できない状況にある。そうした中で、今後の農村社会においては地域の住民が直面している課題を自ら認識し、小さな一歩でも少しずつ課題を解決していく力を形成していく必要がある。その意味でも、地域住民が集う機会を作ることによって、自分たちが住む地域にどのような資源が眠っているか、食を通じて把握し、先行き不安な社会に立ち向かうための「地域力」を養成することを考えたからである。

## 2. 「風土のフード会」の実施とその結果

2010年11月14日に横沢集落、仙台耕作放棄地研究会との共同で「風土のフード会」を実施した。並んだ料理は、当初の予想をはるかに上回る総勢26品目であった。振舞われた料理を下記に列挙する。

1. 茎わかめとはやと瓜の漬物
2. いかニンジン
3. 什(じゅう)
4. いとこね
5. スペイン風ポテトサラダ
6. 十年あえ
7. 白魚の味噌揚げ
8. 山海漬け
9. 味おこわ

10. インゲンの佃煮
11. 竹の子の油炒め
12. 大根と鯖の煮付け
13. かぼちゃの煮付け
14. 大根の甘酢漬け
15. 白菜の漬物
16. セロリとニンジンの和え物
17. おから炒り
18. 白菜と豚肉の蒸し鍋
19. じゃがいもの煮っ転がし
20. おにぎり
21. 豆腐
22. たくあん
23. 豆味噌
24. ぜんまいの煮しめ
25. なずなのおひたし
26. 手打ちそば

食材について、別途ヒアリングを行なった結果、今回の 26 品目の料理に使われた食材(調味料は除く)は 43 品目を数え、そのうち地場産品は 30 品目であった。これをもとに食材の自給率を単純計算してみると、自給率 69.7%という数値になる。この値は相当に高いと評価できる。なぜなら、今回使用された野菜はほぼ自給率 100%であり、外部から調達した食材についても、乾物や魚介類、肉類など自給することは困難な食材がほとんどであるからである。この点から見ても、地元の野菜や食材を生かした横沢家庭料理は十分に外部へアピールできる力を持っている。さらに、今回は 11 月という野菜生産の終盤の時期であったが、季節性のある食材を生かした四季の料理など高原野菜を利用した家庭料理のバリエーションはもっと豊かなものになるだろう。なお、別紙に『横沢家庭料理レシピ』を用意してあるので参照されたい。

### 3. 湖南野菜作りの会の発足

第一次集落調査を行なった後日、われわれの調査したデータをたたき台にして集落会議が行なわれ、今後の方向性を議論する場が設けられた。9 月末の第一次調査の結果報告では、①当面、米プラス兼業農業の構造を急激に変えることは難しいこと、②潜在的な労働力である農家のお母さんたちの存在、③商品化されることのなかった自給的な野菜作りが十分に活かしきれていないという課題を発見し、これからの横沢集落の活性化や維持を考える上で、高齢の方たちのいぎがいの場面を作り出すことが一つ模索されてよいと提案した。とくに、お母さんたちの潜在的な力をもっと活用できるのではないかと。お母さんたちはこれまで自分

たちが食べる分の野菜を何種類も作ってきた農業生産の影の主人公であり、家庭の台所を何年もの支えてきた地元の食材を活かした料理のスペシャリストである。その力を活かして高齢の方でも、むしろ定年退職後の老後を楽しむ気分で活躍できる場面を作り出すことが重要であると説明した。

それを受けて、集落側で即座にそのことも含めた検討会が設けられた。その結果、11月12日「湖南野菜作りの会」が発足し、女性たちが主体となって「仲良く、楽しく、前向きに（3年先、5年先を目指して）」というテーマで活動することが決定した。第一次調査から、2ヶ月も経たないうちに「湖南野菜作りの会」が結成されたのである。正直、あまりの展開の速さに驚きを隠せなかったが、それは裏を返せば集落再生に向けて何かに取り組むことができる集落の結束力と潜在的な力が確実に存在していることを示すものである。われわれもそうした集落の人々が自ら話し合い、自ら行動してみようという気持ちに少しでもお役に立てればと思い、野菜作りの会が生産する野菜のブランド名を考えさせていただいた。その名も「湖南フレンド高原野菜」である。Frank Relax Independence Enjoy Neighborhood Delight の頭文字をとった語呂合わせのネーミングである。意味は「ざっくばらんに、力を抜いて、自立を目指して、楽しみながら、隣人と、喜びを分かち合おう」という野菜作りの会のモットーを示すもので、あくまで肩の力を抜いて井戸端会議の延長戦で作った野菜でありながら、湖南町の標高 540m という自然条件を活かしてまごころこめて作られた湖南町でしか生産することのできない風土が詰まった野菜という思いを込めてある。地域外にアピールする際には別のネーミングのほうがよいかもかもしれないが、当面、「初心を忘れない」ためのスローガンにでもしていただければ幸いである。

また、「湖南野菜作りの会」が発足したことで、農業生産と食卓をつなぐ架け橋はより強化される可能性が生まれてきた。野菜作りの会の野菜は出荷も大切であることに間違いはないが、生産された高原野菜と家庭料理のコラボレーションによる外部発信力も期待されてよい。

## V. むすび～集落活性化にむけて～

以上のように、横沢集落では地域住民が主体となって、活性化に向けた新たな一步を踏み出しつつある。最後に、活性化案として次の点を指摘する。

第一に、これからの農山村の再生や活性化を考えていくためには、既成概念にとらわれることなく、発想の転換が必要なのではないだろうかということである。例えば、高齢化が進んできて地域に活気がなくなっているということを良く耳にする。しかし、地域住民の年齢構成が上昇してくるならば、それに見合った対策を考えるべきではないだろうか。若者がいないことを嘆くよりも高齢者の人たちが自らが地域で生活を送る愉しみや喜びを分かち合える場を創ることが重要ではないだろうか。もちろん、それを実現するためには行政や民間組織などのサポートが欠かせないことは言うまでもないし、国家レベルにおける現在の経済効率性のみを迫及する政策を転換させる必要があるだろう。しかし、まずは地域の抱える課題を自ら認識し、できそうなところから始める試みを模索されて良い。その点において、横沢集落では地域住民が自分たちの地域が直面している課題を認識し始めている。



その点と関連して第二に、集落や湖南町というスケールにおいて緩やかなネットワークを形成する必要があるだろう。従来、農家やイエ単位で行なってきた集落や地域の運営を個人同士のつながりや結びつきできることもある。例えば、お母さんたちの野菜作りの会は農家単位で運営していくのではなく、あくまで有志を募って活動する予定になっている。あまり硬い組織としての活動ではなく、あくまで普段のお茶会などの井戸端会議の延長戦での野菜作りである。そのためには地域リーダーが複数存在していることやそれらの活動を支えるハード面、ソフト面での支援体制を構築することが重要だろう。

そして、最後に、活性化案というよりもむしろ地域活動に取り組む姿勢のようなものになってしまうが、「田舎の日常は都会の非日常」ということを意識して自分の地域に誇りを持ってほしいということである。自分たちが都会の人間の胃袋を満たしているのということをもっと自負してよいと思う。とりわけ、いま世間では地産地消や食の安全性などが注目され、地域の人々が思っている以上に学生や都会の人たちは地元の食材や料理に憧れを持っている。農村の人々が普段食べている新鮮な野菜や山菜は、都会の人たちは生産していませんから毎日お金を払って食べているのが現状である。しかも、朝採り野菜などはわざわざ遠く離れた道の駅や直売所に買いに行くご時勢であるから、地元の食材に自信を持って、無理しない範囲でおもてなしをすることが交流人口を増やしながら活性化を図る一つの目玉になると考える。

#### 謝辞

今回この委託事業を受け、報告書の作成に至るまで多くの方々の協力を頂いた。本事業全体を通じて様々な面でお世話になった福島県規格調整部地域振興課の職員の皆様方には厚く御礼申し上げます。また、実際に調査を行なうにあたっては、湖南町行政センターの高木所長、横沢集落区長の吉田様ならびに集落の皆様、そして、調査前から調査後も変わらぬサポートをしていただいた大内紀男様には感謝の念に耐えない。この場を借りてお礼申し上げます。

#### 追記

2011年3月11日14時46分、東北や関東など広範囲にわたって発生したM9.0の東北関東大震災は未曾有の被害をもたらし、日本中を震撼させた。未だに全体像を掴める状況にないが、必死の救助、復旧、復興作業が進められている。

この度の震災において亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、まだ安否の確認がとれない方々が早く発見されますようお祈りいたします。あわせて福島県においても被災された方々に心からお見舞い申し上げ、一日も早い復興をお祈りいたします。